

2023 年度優秀卒業研究賞 授賞者一覧

授賞者 8 名のうち公開許諾の得られた 7 名について以下の通り公表します。

氏名：稲木瑠亜

指導教員：鈴木華子

論題：心理専門家への非来談に関わる個人的、環境的、経験的要因の探索的研究

授賞理由：

本研究は、悩みを抱えた大学生が学生相談を利用しない理由について、個人的な要因に加えて経験や環境的な要因を構造的に検討したものである。研究 1 では、心理的な問題の架空事例を用いて、問題の重篤性と自己解決能力の査定、および、来談する時としない時の利益とコストについて質問紙調査を行った。その結果、心理的な問題がある状況を現実逃避と捉え、自身の状態を過小評価し自己解決に繋げようとする傾向があることがわかった。研究 2 では、専門家への相談を考えたが結果としてしなかった大学生を対象として半構造化面接を行い、来談の障壁となる要因を検討した。その結果、問題の過小評価、相談への不安、心理的問題は自分で解決すべきだという信念、来談に関わるイメージや身近さ等があることが明らかとなった。支援に繋げるための援助要請の研究は多くあるが、本研究の「必要とするサービスを利用しないのはなぜか?」という着眼点は大変ユニークであり、また、個人を取り巻く文脈をも考慮に入れて要因を検討した点は、問題を個人だけに帰属させず社会全体として心理的な問題に迫る点からも社会的意義が高い。

氏名：高橋 昂希

指導教員：林勇吾

論題：認知的負荷のかかる作業時における音楽刺激が時間評価に及ぼす影響：テンポとドラム演奏に着目した実験的検討

授賞理由：

本研究は逆唱課題によって認知的負荷のかかった状態で、音楽刺激を提示した際に評価される時間の長さについて検討を行った意欲的な研究である。時間の評価には先行研究を良く調べたうえで算出法を用い、テンポとドラム部の条件の変化が時間評価に与える影響、そして音楽の有無と参加者の音楽経験の有無が時間評価に与える影響を検討した独創的な研究である。また、実験刺激(BGM とテンポ)の作成には独自にプログラミングを勉強し、時間と労力を多くかけたことも伺える。以上から、優秀卒業研究賞に相応しい研究として評価できる。

氏名：山上史織

指導教員：寶雪

論題：無断転載への接触がファン活動に及ぼす影響 ―コンテンツへの金銭と時間の消費に焦点をあてて―

授賞理由：

ネット上における無断転載の問題は長らく法学やメディア学の領域で論じられてきた。著作者の権利、利用者の権利、社会全体の幸福など、実に様々な利害が絡まり合っており、議論を重ねていくべき社会課題である。本論文は、この無断転載という問題を心理学の立場から、具体的には「ファン心理」という視点を取り入れて分析、考察したものだ。一見心理学とは関わりが薄いテーマにも、心理学を応用できることを示してくれた、着眼点が光るユニークな研究であった。また、そのユニークさゆえに、様々な領域の先行研究を読みまとめ、自身が持っていた問題意識を研究可能な「問い」に定めていく過程は、まさに道なき道を行く心境だったのではないだろうか。模索を繰り返しながらも、最終的には先行研究をわかりやすくロジカルにまとめあげた点、また得られた結果に対して丁寧に考察を加えた点を特に高く評価し、本研究賞に推薦する。

氏名：瀬川真由

指導教員：森岡正芳

論題：「中性」性自認者のライフストーリーと自己解釈：-セクシュアリティのグラデーション性の探求-

授賞理由：

本研究は、「中性」性自認者のライフストーリーと当事者自身の自己解釈というテーマに取り組んだものである。性の多様性が注目される中、その分類定義も複雑である。瀬川さんは「中性」に注目しXジェンダー、クエスチョニング、ノンバイナリーを自認する当事者6名に対して、質問紙調査と半構造化面接を行った。家族とのかかわり、各ライフステージの体験と自己評価、性自認と自認のきっかけ、そして性自認とジェンダー、性役割への違和感などの課題を設定し、分析を行った。その結果、性自認の流動性すなわち、性自認が時間とともに変わる可能性が示された。本研究は当事者グループに参加し、周到な準備のもとに、当事者のライフストーリーを聴き取り、考察するという成果を上げている。性の多様性のもっともとらえがたい側面に肉薄した点において独創性は高い。さらに性自認のグラデーション性を可視化できた点で、昨今、話題に上がるがその内実を明確に示していない「性の多様性」という課題に対して、この研究のインパクト、社会的貢献度は高い。

氏名：渡邊絵理香

指導教員：土田宣明

論題：アバターデザインと自己意識並びに自己呈示の関連－アバタを閲覧する他者とその関係性に注目して－

授賞理由：

本研究は、オンライン上のコミュニケーションで、ユーザーの分身となるキャラクターであるアバタの作成内容を研究対象としたものでした。アバタを閲覧する他者と作成者との関係性や、アバタをデザインする者の自己意識特性などが、アバタを介した自己呈示に及ぼす影響を検討しました。いずれも、青年期の発達課題(アイデンティティ形成)と密接に関わる問題であったと思います。実験の結果、現実の自己を知られている場合よりも、知られていない場合のアバタ作成において、外見的魅力をよりよく見せる傾向が顕著であること。公的自己意識によって、自己呈示の内容が大きく異なることを明らかにしました。推薦理由は次の3点です。1)まず、アバタの作成過程を研究対象とした視点のおもしろさ。2)一人1-2時間を要した実験課題で50名近くのデータを集めた努力。3)豊富なデータを多角的に分析した点です。以上のことから、優秀卒業研究賞に相応しい研究として評価できます。

氏名：南 花音

指導教員：増田梨花

論題：顧客のホスピタリティにおけるプロセス研究－学生を対象に－

授賞理由：

本論文は、「ホスピタリティ」についての研究である。ホスピタリティの研究は主に海外の産業分野でこれまで盛んにおこなわれてきた。日本では「おもてなし」という概念はあるが、ホスピタリティの概念そのものに関する研究は少ない。しかも、ホスピタリティの質に関する研究は海外の先行研究も少ない。そこで、日本における質的ホスピタリティの高い人の特徴を見出し、それが今後企業の人材育成のプログラム改善へ貢献する一助となることを願いこの研究に取り組んだ。ホスピタリティは、産業分野のみならず、一般的にも対人援助の領域においても必要不可欠である。授賞候補者は来年度から本大学大学院人間科学研究科の臨床心理学領域に進学が決定している。今後も修士論文で本研究を発展させ、また研究を臨床現場の実践にもつなげてほしいと願う。尚、授賞候補者は2年間ゼミ長を務め、ゼミをまとめ、人望も厚い。以上より、優秀卒業研究賞に相応しい研究として評価できる。

氏名：利岡実侑

指導教員：山本博樹

論題：踊りの教え合いが動作系列の習得と運動有能感に及ぼす効果－「覚えられない」という支援ニーズに応える意味と原理の説明のあり方－

授賞理由：

踊りに苦手意識を持つ大学生(40人)に対して教え合いを行い、その事前と事後を比較した実験研究である。参加者の再生動作数、再生連得点、運動有能感、発話のカテゴリーについて、量的側面と質的側面の両面から評価し、t検定、重回帰分析、パス解析等の分析を駆使した。その結果、「動作の意味と原理」を説明する発話が再生動作数を促し、続いて再生連得点を介して運動有能感を高めるという因果プロセスが示された。本研究は実践面と理論面の両面から検討がなされており、動作説明という新たな研究領域の開発に寄与すると考えられる。学部学生の優秀論文に相応しいと判断した。ちなみに、本研究については、学部生の内から関西心理学会で学会発表をしており、高評価を得ていたことを付記する。

以上